

# ルパン三世 短編小説 第1話



© モンキー・パンチ / TMS・NTV

## 新しい相棒はコイツだ!

# 第一章

嫌な予感がした。

トリノに来てから3ヶ月。次のお宝を手にするための準備が順調なのだ。

いや、これまでにないくらい順調すぎる。

夏でもないのに、生ぬるい風が癪にさわる。

「なんで、そんな浮かねえ顔してるんだ、ルパン」と次元が聞いてくる。

「なあ、事前の情報収集がこんなに順調なことって、いままでにあったか？」

「そんなこと言ってもよお、順調なのはいいことじゃねえのか。なあ、五ェ門」

「某は、よくわからぬ。ただ、気が乗らないのであれば、辞めておくがいい」

「ともかく、もうひと探りしてから決めるとするか」

そう漏らした俺の言葉に「好きにすればいい。ただ、危ない山はゴメンだぜ」俺に背を向けたまま、ソファに寝そべる次元が呟く。

「某も、お主の企てには乗るつもりだ。しかし、危ない山と不二子が関わる山はゴメンだ」と苦い顔をした五ェ門が答える。

「それにしてもよお、もうひとりの相棒、この間の追いかけてこのせいでお陀仏じゃねえか」  
そういう次元の指差す先には、動かなくなった黄色い『Nuova 500』が寂しげに佇んでいた。  
先日、山の上に立つ城からお宝を手に入れた際、地元警察と派手なカーチェイスを楽しんだのだが、まさか最後に山肌を走ることになるとは思ってもみなかった。

「黄色い相棒、パーツが届くまで何ヶ月もかかるらしいじゃねえか。

今回の山には間に合わねえぞ」次元の言葉を聞いて、俺はうっすらと微笑んだ。

「そんなことは、お見通しよお。そこでだあ、今回は新しい相棒と手を組んだわけよ」

俺はアジトの奥に隠していたそいつの側に近づき、そっとシートを引いた。

黄色いアイツと似た純白の『500』が顔を見せた。俺たちに微笑みながら挨拶しているように見えた。いつもの相棒より、ひと回り大きいボディサイズではあるが、小回りが効くことや活発な走り、そして何より見た目の雰囲気、俺たちの相棒に相応しい。

次元と五ェ門も、そのクールな顔にニヤリと微笑を浮かべ挨拶を交わしていた。

## 第二章

マニフィコ美術館のある街ラビリントには、いつもの通り笑顔を交わし合う穏やかな日常が広がっている。

花屋、カフェ、八百屋、肉屋……。人々で賑わう街の姿は幸せそのものに見える。

「この街だったら、毎年旅行に来たいモノだなあ」という俺の言葉に「オレからしたら、なんだか笑ってる顔すら、ウソに見えるぜ」と次元。

知り合ってから長い時間を共にしたが、次元も随分疑い深くなったものだ。

すると、幼い少女が微笑みながら駆け寄ってきた。

「おじちゃんたち、どこから来たの？」

「お嬢ちゃん、おじさんたちは世界中を旅してるんだ。どこから来たかは、こっちが聞いてえくらいだぜ」と答えると、「ふ〜ん。じゃあ、お父様にそう言っておくね」といい、駆け足で少女は立ち去った。その後ろ姿を見つめながら「なんか、嫌な感じがしねえか」と思わず言葉が漏れる。

「一旦、アジトに戻らねえか、ルパン」次元のその提案に、俺は無言で賛同した。



## 第三章

俺たちが狙うお宝は世界一の大きさを誇ると言われているエメラルド「微笑みの女神」を収蔵している「マニフィコ美術館」の館長であり、オーナーでもあるダビデ・アマタバは、怪しげな微笑を浮かべながら、今日も館内を我が物顔で闊歩している。

ここ「マニフィコ美術館」は、アマタバ家の元頭首 G・P・アマタバの巨大な城と資産を孫であるダビデ・アマタバが受け継ぎ、先祖と自身のコレクションを収蔵している。そのコレクションの数と価値から、世界屈指のミュージアムとして長きにわたり注目を集め続けている。

そのため、常に腕利の盗人たちから狙われる美術館ではあるが、これまでの被害は 0 件。しかし、その理由は未だに解明されていない。それどころか、盗みに入った同業者たちは、ことごとくその行方を暗ましている。そのため、いつしか俺たちの界限では「迷宮美術館」と呼ばれ、恐れられるようになっていた。

俺はスーツに身を包んだ紳士に変装し「マニフィコ美術館」へ潜入した。予告状を出す前にプランの確認と警備システムのチェック、そして今回のお宝「微笑みの女神」の美しさを改めて拝ませてもらうために。

すると、隣の展示室からこちらへ、薄汚い笑みを浮かべたダビデ・アマタバが歩いてきた。細身で長身な身体にシルクハット、気に食わない出立ちに髭を蓄えたアマタバの傍らには、何故か親しげに話をする不二子がいた。

毎度のことだが、不二子が関わると何かと面倒なことになる。しかし、何度騙されても許せてしまうところが、なんとも腹立たしい。

館内の様子は事前の情報と一寸も変わらない。準備は完璧だ。ということで、そろそろお暇するでしょう。

俺は、退館する直前に、お宝が展示されているガラスケースに予告状を貼り付けた。

「微笑みの女神は、俺様がいただくぜ」

警備員の通報を受け、まもなくアマタバは予告状のもとに現れた。その瞬間、ニヤリと嫌な笑みを浮かべて、ボソッと呟いた。「ルパン三世。盗れるものなら、盗ってみなさい」

## 第四章

迷路のように入り組んだ街ラビリントを、新しい相棒『500』が走る。

もともと城下町だったせいか、トリノの中心地から少し離れただけなのに、近所のつながりが強い片田舎の村にも似た印象がある。とにかく、平和を絵にしたような朗らかな街だ。

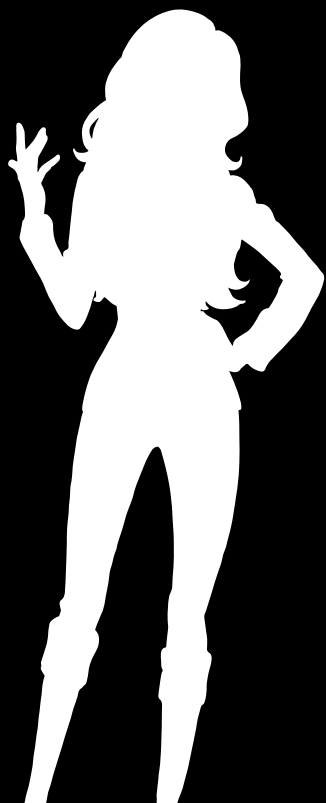
何度か訪れたが、喧嘩や窃盗、小競り合いさえ、ここでは見たことがない。

屋根や壁の色などが統一されている、ヨーロッパでよく見られる歴史を感じさせる美しい景観を保っているこの街は、どのアヴェニューも似たような雰囲気醸し出す。そして、変形の碁盤の目のように細い道が幾重にも重なり合っている。ラビリント(=迷路)とは、よく名づけたものだ。

そんな道を歩く俺たちのすぐ横を、時折小さなクルマやスクーターが通り過ぎていく。

ここでは、大型のクルマはご法度だ。この街では、幅の狭い道が行く手を阻んだり、曲がりきれないほどの鋭角なカーブが現れたりする。こんな道を走らなければならない今回の山に、新しい相棒『500』は適役だ。

それにしても、ここ3ヶ月。この場所に来るといつも得体の知れない違和感がまとわりつく。どこか気が抜けないのは何故だ。自分でもわからない。しかし、今回の計画は至って順調だ。至って順調なはずだ。



## 第五章

決行の日がやってきた。

23:13。俺たちは予定通り『500』で「マニフィコ美術館」に向かった。

静まり返った街は、昼間の顔とは様子が違う。シャッターを半分閉じた Bar の軒先で酔い潰れている紳士を尻目に、小径を『500』で軽快にすり抜ける。

24:00 ちょうど、目的地に到着した。この美術館には、すべての廊下を映し出す監視カメラ、入り口と主要作品には赤外線センサー、そして各美術品にはわずかな振動で反応するアラームが仕掛けられている。しかし、どれもありきたりな畏ばかりだ。

次元は『500』で、五ェ門は美術館の入り口で、万一に備えて身を潜める。そして、俺は「マニフィコ美術館」の中に、ひとりで潜り込んだ。まずは、監視室に忍び込み、監視カメラを制御。その後、コントロールルームで赤外線センサーを解除した。当然、バックアップシステムの解除も手抜かりはない。そして、予定通り、長年夢に見たお宝「微笑みの女神」を目の前にした。しかし、照明のせいかな、この間見たそれとは輝きが違う気がする。

「次元、外の様子に変わりはないか？」独自の回線で連絡を取る。「おお、人っこ、ひとりいねえな」「風の音以外、何も聞こえぬ」、次元に次いで五ェ門が現場の様子を語る。「微笑みの女神」には、振動センサーの他に、展示箇所にかかる重量が一瞬でも変化するとアラームが作動する畏が仕掛けられている。ただ、このシステムはこれまで何度も対峙してきたものと等しい。油断しない限り、失敗は考えられない。

俺が求めていた「微笑みの女神」は本当にこれなのか。頭の中で自問自答を繰り返すとともに、若干の違和感を覚えながら、いつもの7つ道具を駆使し、ガラスケースを開け、首尾よくお宝を GET した。しかし、誰も現れないし、警報音が鳴ることもない。こんな手薄な警備の美術館なのに、何故いままで誰も仕事を成功できなかったのか。俺の中で、いくつもの疑問符が湧き上がってきた。

## 第六章

「微笑みの女神」を手中に収め、何事もなく次元の待つ『500』へと辿り着く。

「やけに上手くいきすぎじゃねえか？」

そういう俺の言葉に、「上手くいく分には、いいじゃねえかよ」という次元。

「何か、気になるのか？」と五ェ門。

俺の胸のざわつきが、一刻も早くこの場を立ち去れと急かす。

「とにかく、ずらかろうぜ」

次元が『500』のアクセルを思い切り踏み込む。「パン屋の角を右」「バーの角を左」「カフェの角をまっすぐ」俺の道案内を聞きながら、次元は小気味良く、そして正確にステアリングを切っていく。だけど、何か変だ。

本来ならば、10分ほどで抜けられるはずの街の中に、すでに13分ほどいる。

「次元、何かおかしいぜ」

「お前の言う通りのルートを走ってるじゃねえか」と次元。

「某も、同じ道をグルグル回っているように思えるが」と言う五ェ門の言葉に、何度も大きな試練に遭ってきた俺たちにも、次第に焦りの色が滲みはじめてきた。

「肉屋の角を右」地図を見ながら道案内する俺に、

「ルパン、本当に合ってるのか？肉屋なんてないぜ？」と次元が言う。

「えっ、そんなわけ・・・」と答えた直後、目の前を黒猫が横切った。それを避けようと、次元が急ブレーキをかけながら、素早く、そして大きくハンドルを切る。ものすごいブレーキ音とともに、鋭い角度で石の壁に突っ込んでいく。

「わあ！！！」と、大きな声を出し『500』が壁に衝突した直後、俺たちはこの街の謎を目の当たりにした。

「なんだ、これ？」次元はつぶらな目を大きく見開いた。

「なるほど、こういうことだったのか」

ずっと感じていた違和感の正体はこれか。俺は、この街の化けの皮を暴くと心に誓った。

## 第七章

翌朝、ラビリントはいつも通りの賑わいを見せていた。

なかでも、公園近くの掲示板の前は多くの人で溢れかえっている。

そこには「ルパン一味、微笑みの女神を盗めず！」とデカデカと書かれた壁新聞が掲げられていた。その最前列には、にやけ面のアイツがいた。

「天下の大泥棒も、私たちのコレクションを盗むことは不可能なのです」集まった多くの民衆に向け、ダビデ・アマタバは堂々と勝利宣言をしてみせた。そして、その場に集まった多くの民衆から歓声が上がった。老人になりすました俺は、その様子を観客のひとりとして見ていた。いや、睨んでいた。

アジトに戻って確認した「微笑みの女神」は、やはり真っ赤な偽物だった。

精巧に作られてはいたが、色のついたガラス玉だ。

「俺たちも、ずいぶん舐められたもんだなあ」

ガラス玉を見つめながら呟く次元に

「あの街にリベンジしてやろうじゃないの」と俺は答えた。

「いろいろ言い伝えはあるけど、黒猫が横切るっていうのは、やっぱり幸福が訪れるサインなんだな。あの黒猫には、心から感謝だ」と次元。

「あの時、壁にぶつからなかったら、どうなっていたことか」という五ェ門に、

「俺の拙い運転技術も役に立ったってことだなあ」と複雑な表情を浮かべながら次元が言う。

昨晚、俺たちを悩ませたラビリントには、いくつもの細工が仕掛けられていた。

それは、本来道であるところが、壁が描かれたロールスクリーンで塞がれていたのだ。

しかも、本物と見分けがつかないほど精巧に描かれたそれは、まるで映画のセットのようだった。その布の壁に阻まれた俺たちは行くべき道に辿り着けず、街の外に出られなかったというわけだ。

「それにしてもよお、ルパン。あの布の壁、どういう仕組みだと思う？」

「わからねえなあ。ただ、このままじゃ終われねえってことだけは確かだぜ」

俺の言葉に、2人の相棒は無言のまま大きくなづいた。

To be continued